第 12 回研究例会

概要

ユーラシア歴史文化研究班としては、第 2 回目となる研究例会は、まず藤田髙夫研究員が、石刻の隆盛期である後漢後半の墓碑のうち、後漢の文人蔡邕の『蔡中郎集』に収められた墓碑を採りあげ、テキスト分析の初歩的考察を行った。次に、篠原啓方研究員が、15 世紀における朝鮮士大夫墓の墓碑をとりあげ、その立碑から見た朱子家礼の受容の様相について報告した。最後に西田愛研究員が、2022 年 8 月にバルティスタン（パキスタン東部）において行った、チベット語石柱碑文と磨崖碑文、岩石碑文に関する調査結果を報告した。（主幹研究員／森部　豊）

発表要旨

「テキストとしての後漢石刻　―『蔡中郎集』所収墓碑へのアプローチ―」

本報告では、石刻の隆盛期である後漢後半の墓碑のうち、後漢の文人蔡邕の『蔡中郎集』に収められた墓碑を採りあげ、テキスト分析の初歩的考察を行った。はじめに後漢の墓碑の一例として、蔡邕の手による「郭泰碑」を紹介し、とりわけそこに含まれる情報を概観した。次に、『蔡中郎集』から 28 碑を選び、底本として Donald Sturgeon 氏が主導する Chinese Text Project のデジタルデータを用いてテキスト分析を加えた。具体的には、文字の共起ネットワーク、1 文字および 2 文字での頻出語の抽出結果などを示した。最後に、後漢の墓碑のテキスト分析のために必要となる辞書作成のステップにおいて、『蔡中郎集』所収墓碑の有用性を指摘し、今後のロードマップを示した。（研究員／藤田髙夫）

「墓碑の立碑から見た 15 世紀朝鮮士大夫墓の朱子家礼受容」

本報告は、首都圏に分布する高麗時代末期～朝鮮時代初期（14 世紀後半～15 世紀）の墓碑４４例を現地調査し、その内容を類型化して『家礼』の受容がどのようであったのかについて考えた。まず立碑位置については墓の前部中央であるものが多く、家礼の「立小石碑於其前」に即している。次に墓碑の規格については、地上に露出している部分を基準として見ると、家礼の「高四尺、趺高尺許…、但石須闊尺以上、其厚居三之二」よりは小さいものが多い。碑首の形状は朝鮮時代の碑に特徴的な「荷葉」をかたどったものが多く、家礼が定める「圭首」とは異なる。年月の記載については「立石」の日が多く、次いで「葬」の日が多い。特に「葬」の日は、死亡日からおおよそ 4 カ月以内がほとんどで、家礼「三月而葬…」（三カ月で葬儀を行なう）の内容に則ったものであると考えられる。（研究員／篠原啓方）

「西チベット碑文調査報告」

本発表では、2022 年 8 月に現地調査を行なったバルティスタン（パキスタン東部）のチベット語石柱碑文と磨崖碑文、岩石碑文に関する報告を行なった。これらのチベット語碑文は、古代チベット帝国期、およびその子孫がたてた西チベット王家による当該地域への侵攻

を考える上で、重要な史料であると言える。このうち、マンタルにある磨崖碑文については、2019 年に調査を実施したラダック（インド北西部）のスマンラ磨崖碑文と、内容および構成が類似することがチベット語録文の比較を通してわかってきた。また、岩石碑文については、バルティスタンのシガル、ゴル、フォンナク、ユゴの 4 地点における実見調査の報告を行なった。バルティスタンの岩石碑文は、インダス川、シュヨク川沿いに散在するという地理的な共通性のみならず、録文の内容からもラダック地域のチベット語岩石碑文との関連が明らかである。（研究員／西田　愛）